連載
スラウェシ
市民通信
④

# マカッサル・カレボシ広場と七基の墓

ニラム・インダサリ

カレボシ広場の７基の墓
（Ilham Halimsyah 撮影）

## ●象が突然に暴れ出す

はっきりした理由は分からないが、何年も調教されてきたサーカスの象が何頭も突然に暴れ出した。サーカスのオーナーにはその原因が全く分からない。その日、カレボシ広場でのサーカス公演は大混乱のまま中止された。サーカスのテントの防護柵も破壊された。四〇歳ぐらいのインドゥラという女性は、一九八四年に起こったこの事件について「カレボシの『守護神』に許しを請わなかったからよ」と語った。

ある夕方、私はカレボシ広場のそばにある小さなワルンでインドゥラに会った。彼女は暴れ出したサーカスの象の事件についてだけでなく、カレボシの守護神についても話してくれた。様々な奇妙な事件と守護神と称しているものとの関係について信じている様子で、カレボシ広場の中央にある七基の墓について語り始めた。

## ●七基の墓へ行ってみる

七基の墓というのも私の好奇心をそそる話である。スディルマン通りにある小学校にまだ通っていた頃、体育の授業は学校のすぐ目の前にあるカレボシ広場でよくあったのだが、そのとき、私は友だちとそこに七基の墓があるのを見た。そして今回、二〇〇六年四月のある木曜日の夜、私はそこへ行き、七人の参拝者に出会った。

真っ暗な夜にその七基の墓を見つけることは、実は思っていたほど難しくなかった。広場のなかでブラブラしている一人の男が「ロウソクを灯せば大丈夫」と教えてくれたのだが、実はそれぞれの墓の上にロウソクが立てられていたのだ。その場所に着くと、私は普通の墓参りのときと同じように墓に向かってあいさつをした。

その夜に出会った参拝者たちは信心深く見えた。暗がりのなか、ロウソクのゆらゆらと揺れる灯りと薄暗い水銀灯の光の間で、彼らがそれぞれの墓の上にタイバニ・エジャと呼ばれる一本の赤いロウソクを立てて火をつけ、花を手向け、墓の土の上に水を撒くのを見ていた。加えて、ピサン・ラジャ（pisang raja）という種類のバナナ、若い椰子の実、地鶏の若鶏（anak ayam kampung）のお供えを運んできていた。

カディル・ダエン・ナバという名の墓守が説明してくれたので、私はその参拝者集団のことについて少し知った。墓守によると、彼らはカレボシ広場を囲む道路の一つに面したワルンの所有者であった。そこで翌日、ワルンを訪ねてインドゥラと出会い、彼女がその墓守について話してくれた。

インドゥラの姪のアンディ・アニは、前日の晩の参拝の話を補完してくれた。アニによると、あの参拝者集団が参拝する数日前に、彼女の伯母にあたるスリという女性が急に精霊に取りつかれた。それをみた彼女の家族の一人が「伯母が治れば、七基の墓に参拝いたします」と祈りを捧げた。

サーカスの象が暴れた事件はカレボシ広場で起こった様々な奇妙な出来事の一つに過ぎない。彼女はそう信じていた。そしてそう信じているのはインドゥラだけではなく、周りに座っている人々も、イベント会場が突然に崩れて混乱のまま中止となるといった奇妙な出来事は、カレボシの守護神が介入したからである、と信じていた。

おそらく、カレボシで何かをしたいときにはまず守護神さまに許しを得るのがよろ

7基の墓に参拝する
（Ilham Halimsyah撮影）

しいと広く信じられているので、式典、スポーツ競技会、ナイト・マーケット、ミュージック・コンサートなどがあるときには、いつも多くの人たちがこれらの墓にあらかじめ参拝するのである。参拝することで、カレボシで催されるイベントがつつがなく行われるよう、許可をもらった印になると、彼らは確信しているのである。

## ●七基の墓の不思議

イベントを実施するための許可をもらう必要から参拝する以外に、一部の人々は次のように信じている。すなわち、この七基の墓の所有者は人間と神との媒介者であり、だからこの場所での祈りはかなう可能性が高いのだ、と。こう信じているのはその多くがムスリムであるマカッサル族だけでなく、華人系のなかにもここでいつも祈りを捧げる者がいる。「参拝者は、ビジネスがますます儲かりますようにとか、結婚相手が早く見つかるようにとかまで、いろんなことを祈るのさ」とインドゥラは言う。

それでは、いったい誰がこの七基の墓を埋葬したのか。なぜ一般の墓地に埋葬されなかったのか。実はずっと前から私はこのことが疑問だった。小学生の頃、カレボシ広場の周辺を走る行事で、広場の東口から入ると、いつも走る速度が落ちるのだが、広場の草っ原に墓の列が見えると、なぜか恐くて、走る速度が逆に速まったものだ。

マカッサル市博物館にある地図を見ると、カレボシと呼ばれる場所は昔、ゴワ王国の領地で水田だった。もし昔のカレボシが水田だったとすると、水田地域に七基の墓があるというのは奇妙な感じがする。後にこの場所は開放広場になり、街の中央広場へと機能を変えていくのだが、それでも七基の墓がずっと存在してきたのは不思議だ。

## ●七基の墓の詳細を尋ねてまわる

ダエン・ナバは七基の墓の詳細についてはよく知らないとのことなので、ゴワ県スングミナサにあるゴワ王国の宮殿「バッラ・ロンポア」（Balla' Lompoa）で情報を探してみるように勧められた。そこへ行くと一人の案内人に出会った。七基の墓については多くを知らないが、墓に埋葬されているのは七人の兄弟であるとのことだ。彼によると、七人はマカッサル市の南方六〇キロ離れたタカラール県のガレソンで埋葬され、それが理由で「ガレソンの七人」（Tujua ri Gaesong）と呼ばれている。

意外なことに、この七人兄弟は頻繁に乱暴をふるうので一人の高僧が懲らしめた。この懲らしめによって、七人兄弟の魂はこの世とあの世の間をさまよっていた。彼らの死後、人々は彼らの魂を他人に取りつかせて悪用した。このような心の持ち主は、七人兄弟の末っ子に援助を願うのが常だった。この末っ子が七人のなかで最も乱暴だったのである。末っ子は人の体に取りつく能力を持っていた。

バッラ・ロンポア博物館の階段で話し終えると、案内人からバッラ・ロンポアからそう遠くないところに住むアンディ・ジュフリ・テンリバリ（通称ダエン・ピレ）という男性に会うよう勧められた。

## ●ダエン・ピレから話を聞く

私が来たのをダエン・ピレはしかめっ面をしながら見た。当然だろう。知り合いでは全然ないのだから。会いに来た理由を尋ねられたので、七基の墓について知りたいと伝えた。すると彼は、閉じた口を手で押さえ、しかめっ面のままじっと私を見つめた。長々と説明したくない様子で、七基の墓についての質問を紙に書くように求めた。「どれに答えられるか選ぶからな」と彼は言って、二日後に回答すると約束した。

二日後、もう一度彼に会った。しかし回答は全くなかった。この二日間、私が紙に書いた質問に答えるのを遮るような雰囲気を常に感じていたと彼は打ち明けた。「答える前に許可を得なければならぬ」、「瞑想しながら許しを請うのであなたの名前を教えてくれ。それを七基の墓の持ち主に伝えるから」、「許しをもらったら、答えてあげる。現世の者の怒りに触れるほうが、この世にいない者の怒りに触れるよりはましだから」。ダエン・ピレはこのように言った。

彼は、決まった時々に喧騒から離れ、ゴワ県スングミナサの自宅で瞑想する。瞑想は通常、満月の夜にする。瞑想の前に、最

連載
スラウェシ
市民通信
④

# マカッサル・カレボシ広場と七基の墓

低でも三房のバナナ、若い椰子の汁、長さ一メートルの白い布を用意する。瞑想のなかで、ダエン・ピレは七基の墓の所有者と対話する。時間が経つにつれ、墓の所有者と赤い糸でつながる感じがしてくる。そして誰の墓なのか、どこから来たのか、いつからあるのか、を知らされるのである。

三日目、全部ではないが、ついに答えを聞くことができた。実は、ダエン・ピレは約九年前からしばしば墓へ参拝に行っていた。彼が出会った何人かの語り部の話を信じたからだ。語り部の話はみな同じだった。すなわち、いずれマカッサルとその周辺は大変な騒ぎに見舞われる。その騒ぎの中心はカレボシだ。そこで人々は殺し合い、土は血で覆われ、それは足首まで浸かるほどになる。そしてそれを鎮められるのは、空から舞い降りる七人の神の使いだ。彼らはちょうどあの墓の上に舞い降りる、と。

語り部は、この出来事をコーランに書かれた話にも結びつける。コーランには、偽預言者ダッジャール（Dajjal）が現れてこの世を大混乱に陥れるとの話がある。彼らによれば、ダッジャールによる混乱状態のときに空から七人の聖者が降りてくる。

しかし、ダエン・ピレを確信させた話はそれだけではない。ロッテルダム要塞で観光案内をしたこともある彼は、古文書の中にその墓についての情報があるかもしれないと思っていろいろ探してみた。

## ●七基の墓をめぐる歴史

彼によると、墓の歴史は一〇世紀にさかのぼる。その頃のカレボシは、北はタロ川から南はバロンボンに至るゴワ＝タロ王国の領域にあった。当時のマカッサルの中心はソンバオプ要塞にあり、そのため、この要塞は当時マカッサル要塞とも呼ばれていた。一六六七年にゴワ王国とオランダ東インド会社（VOC）との最初の戦争が勃発し、VOCが勝利して、ゴワ王国のハサヌディン王は同年一一月一八日にブンガヤ和平協定に調印、マカッサルの中心の一部はウジュンパンダン要塞へ分割された。

スピールマン海軍少将に率いられたVOCは、まだ脅威を感じていたため、一六六八～一六六九年にゴワ住民の穀倉を襲撃し、ソンバオプ要塞を焼失させた。この二度目の戦争の後、VOCはついにマカッサルの中心部をウジュンパンダン要塞へすべて移し、ロッテルダム要塞と改称した。スピールマンは一六七〇年に市域拡大を決意し、市域拡大のマスタープランは彼の後任によって引き継がれた。一八九〇年にマカッサルは中核都市となり、蘭領インド政府はカレボシを市域内へ含めた。

もっとも、それ以前に、ゴワは一〇世紀に大混乱を経験した。中心人物がいない当時のゴワでは、誰もが覇を競い、自分が最も偉大であることを証明しようとしており、弱き者は生存競争に敗れていった。

そんなある日、ゴワは七日七晩、止むことのない激しい雨と雷に見舞われた。そして八日目になって雷は止み、霧雨のなかに虹がかかった。以前は乾いた、後にカレボシと呼ばれる土地は水浸しになっていた。

そのとき、人々の何百もの視線は、その土地の真ん中で七カ所の土が急に盛り上がってくるのに釘付けとなった。そして黄金のマントを着た七人が現れ、霧雨の中へ消えていった。彼らが去った後には、いい匂いのする七個の盛り土が残されていた。

## ●カレボシという名前の由来

七人がどこから来たのか、知る者はいない。しかし、七人がブギス＝マカッサルの神話上の聖人トマヌルン（tomanurung）であり、神からゴワへ遣わされたと信じられた。七人が「雨をもたらす神」という意味のカラエン・アンゲラン・ボシ（Karaeng Anggerang Bosi）と呼ばれたのにちなみ、人々は、王国の水田となるこの土地にカンロボシ（Kanrobosi）という名をつけた。カンロ（kanro）は「神の贈り物」、ボシ（bosi）は「雨」あるいは「溢れる」という意味である。VOCはこの名をコニンスプレイン（Koningsplein）へ変え、オランダ植民地時代が終わると、現在のカレボシ（Karebosi）へ変更になった。

七人が現れた不思議な出来事から五〇〇年ほど経ち、ゴワ王国七代目バタラ王の指揮の下、七個の盛り土は、カリスマ的な七

7基の墓に何を祈っているのだろうか
（Ilham Halimsyah 撮影）

人の聖人の生地として手厚く扱われることになった。そして、それぞれの盛り土に一個ずつ、計七個の石を置き、墓に似せた。

時は流れても、この七基の墓に参拝することは、空から降りてきたと考えられる七人の聖者を人々や為政者が敬う伝統の継承と考えられている。一九六五～一九七八年にダエン・パトンポがマカッサル市長だったときに、この七基の墓は閉鎖されてしまったが、墓の伝説を知る人々によって、後に再び開放された。

## ●七人の聖人は再びやってくる

一部の人々は、七人の聖人はそのうちまた地上へ降りてくると信じている。以前と同様、予想できない状況が起こる。それはすでにロンタラ（注・ブギス＝マカッサル族固有の文字、またはそれで書き残された口承伝承）のなかに記されている。「馬（権力者を示す）と犬（政策決定者を示す）が噛みつき合い、蹴り合い、血が溢れる」と、ダエン・ピレはその一節を引用した。

話によれば、血の洪水が起こったとき、カレボシには突然七つの宮殿が現れる。面白いのは、建物が同じ形であるだけでなく、中にいる聖人の体つきも顔つきも態度も瓜二つなのだ。でも、七人の聖人のなかに最強のカリスマを持つ者がいる。彼こそが第一の指導者となり、混乱した状況を回復できる人材を指名する。ジャワ神秘主義の世界では、そのような聖人をピニンシッ王（Ratu Piningsit）と呼ぶそうだ。

しかし、ダエン・ピレは七人の聖人それぞれについて詳しくは語っていない。その話はまだタブーであり、それは彼と伝統的語り部との間でのコンセンサスであり、あるいは七人の聖人との間でのそれなのかもしれない。彼には理由があった。つまり、七人の聖人について話をすれば、誰かにあるいは国の状態に様々な形で影響を及ぼす可能性がある。「たとえば天災、混乱、困窮が起こって、人々の生活や為政者に悪影響を与える」と彼は言う。

七基の墓への参拝という儀式は今日に至るまでずっと続いている。人々は信心に基づいてやってくるが、その目的は様々である。伝説を信じ、参拝する人々は、頭を下げ、黙って祈りを捧げ、赤いロウソクに火を灯し、花を手向け、儀式を行う。カレボシ広場は選挙運動の季節の政治演説、サッカーの練習、音楽コンサートなど、様々なイベントの喧騒に満ち溢れているが、そこにひっそりと、カレボシの七人の守護神の伝説が息づいている。

（Nilam Indahsari／ハサヌディン大学学生）

### 〈訳者による解説〉

筆者のニラム・インダサリはハサヌディン大学国際関係学科四年生で、パニンクルの常連投稿者であると同時に、パニンクル自体のコーディネーターも務める女性である。本稿は、パニンクルの投稿者の間で最も人気のあった作品でもあり、積極的に現場へ足を運んで新しい発見を追求する彼女の姿勢に共感する仲間が多い。

カレボシ広場は、マカッサル市の中央に位置する大きな広場である。インドネシアでは大都市から村まで、どこも町の中心に広場がある構造があり、大規模な集会やイベントが頻繁に行われる。カレボシ広場はまた、道路距離を測る起点でもある。雨季には巨大な池に変身するが、かつて水田だったという話を裏づけるかのようである。

訳者は、恥ずかしながら、カレボシ広場に七基の墓があるという話を本稿で初めて知った。イスラーム色が強いと言われるマカッサルで、七基の墓が参拝の対象として大事にされており、その歴史が一〇世紀にさかのぼるならば、イスラーム化以前の精神世界がイスラーム教と共存しつつ、生き延びてきたことになり、興味深い。

また、七人の聖人の話は、このカレボシ広場だけではなく、世界各地にあるようだが、何らかの共通性があるはずである。

マカッサル市では今、カレボシ広場を整備して、地下に駐車場やショッピングセンターを建設する計画がある。当然、七基の墓に許可を得てから着手するのだろうが、災いが起こらぬことを祈るばかりだ。

（まつい　かずひさ／在マカッサル海外調査員）